

[掲載紙] 上毛新聞「点描ぐんま経済 日銀支店長 見聞録」

[掲載日] 2017年5月26日

[テーマ] 自然に囲まれる前橋—「スロー」な暮らしを—

4月に前橋に赴任して以来、毎朝、目前に広がる雄大な赤城山の稜線（りょうせん）を見るのを楽しんでいる。東京のような巨大都市で暮らしていたときはビルに視界が遮られるせいか、都会から離れて旅する機会がしばらくないと息苦しさを覚えていた。自分が住んでいる環境、とりわけ、景観や空気、水といった自然環境は、癒やし効果と相まって、その価値が大きいことを今は実感している。

経済協力開発機構（OECD）は、人々にとって重要な、生活の質にかかわる生活のさまざまな側面に焦点を当てた上で、「幸福度指標」を各国別に作成し、公表している。その指標を構成する要素としては所得、仕事と生活のバランス、住宅、健康状態などが挙げられているが、これと並んで環境の質が含まれている。

日本の幸福度指標のうち、環境の質の指標をみると、空気の質、水の質は、他国に比べてそれほど強みがある分野とはなっていない。OECDの別の研究によると、一般的に、一人当たりGDPの上昇は、環境の質の向上につながるわけではないようだ。

物質的な豊かさだけに依存しない暮らし方、いわゆる「スロー」な暮らしの魅力は近年いろいろなところで取り上げられるようになってきている。いみじくも今月、スローシティーの考えに賛同したとして、「前橋市が国際団体のチッタスロー（スローシティー）協会に加盟申請した」とのニュースに接した。申請区域は市の北半分に当たる赤城南麓エリアである。

スローシティーが満たすべき条件は多岐にわたるが、リサイクルや再利用の技術を重視した環境対策など、環境との共存が意識されているようだ。豊かな自然に囲まれて暮らす価値は、今後、より重視されるようになっていくのではないだろうか。前橋市のニュースはこうしたトレンドの好例であり、今後スローシティーの精神を生かして、どのようなまちづくりが展開されるのか、注目したい。

（ 日本銀行前橋支店長
岸 道信 ）